【文書 05】

「ジャイナ教についての実地調査
――釈尊の生活と教団組織を知るために――」
調査報告会

事務庁舎 302 会議室 2006.2.8

調査担当者　中島克久・岩井昌悟

調査協力者　RAJIV RANA

期 間　2005 年 9 月 7 日～10 月 5 日

はじめに
研究課題
研究方法
仏教とジャイナ教
ジャイナ教概観
調査方法
調査協力者
日程
調査項目
サンガの構成員
出家者の種類
僧階
寺院の土地・建物の所有権と管理
１年の過ごし方
雨安居
遊行
日常生活
食事
身だしなみ
まとめに代えて

【はじめに】

中央学術研究所の中島克久と申します。このたび、9 月 7 日から 10 月 5 日の約１ヶ月間、東洋大学・森　章司教授を研究代表者として進めております「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」の一環といたしまして、現代ジャイナ教 Digambara（裸形、空衣）派についての現地調査を、ここにいます研究分担者の東洋大学・岩井昌悟先生と行ってまいりました。今日、そのご報告をさせていただきます。

本調査は驚きの連続でもありましたし、また 2500 年前の釈尊ご在世の当時のインドについ

て、インスピレーションを得るような思いをいたすこともございまして、インドではたいへん充実した時を過ごさせていただきました。それはいま、ここにすぐご提示できる目に見える成果のほかに、時間とともに熟成されて大きな実りとなるような、目に見えない成果もあることをわれわれは確信しております。ここに改めまして、このような機会を与えてくださいました開祖さま、会長先生、そして教団の関係者の皆さまに心より感謝を申し上げます。

【研究課題】

「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」におきまして、われわれは「釈尊教団年表」を作成しようとしております。そのためには次のようなことを知る必要がございます。

(1) 釈尊はどのような１年を過ごされていたか、

(2) どのように遊行をされていたか、

(3) 雨期はどのように過ごされたか、

(4) 釈尊の弟子たちはどのような日常生活を送っていたか、

(5) 釈尊と弟子たちの関係はどのようなものであり、その教団（四方サンガ）はどのようなものであったか、

(6) 弟子たちの教団（現前サンガ）はどのように運営されていたか、

ということなどです。

【研究方法】

これを研究するための第１の資料は言うまでもなく原始仏教聖典の特に律蔵でございます。そこで研究代表者の森章司先生が 2002 年の 12 月 13 日に、日本テーラワーダ仏教協会のアルボムッレ・スマナサーラ長老をお招きして行いました「釈尊はどのような生活をされていたか」という公開シンポジウムにおきまして、これをもとにして基調報告をされました。

しかしこれらの事項はいわば形而下のことであり、これを文献から知ることは自ずと限界がございます。そこで実地調査が必要になりますので、乾期と雨期を選んで 2 度のインド現地調査をさせていただきました。これにつきましては 2000 年 1 月 28 日に「原始仏教聖典資料における遊行に関する諸記事の実地検証調査報告会」と題しました乾期の調査報告会と、2001 年の 10 月 26 日に「雨期におけるインド仏蹟の現地調査報告会」と題しました雨期の調査報告会において、いずれも森先生が報告されています。これらの調査によってわれわれは実の多くのものを学ばせていただきましたが、いかんせん 2500 年前のお釈迦様の生活や教団のあり方にじかにふれたという実感を感じることができません。

そこで研究会としては、２つの調査をする必要性を感じておりました。１つはスリランカやミャンマー、タイなどの東南アジアの上座部仏教において実際に出家生活をしてみることであ

り、もう１つはインドにおけるジャイナ教の調査です。

前者は仏教であるがゆえにより直接的ではありますが、すでにかなりの変質を被っていることも予想されます。しかもこの方面の調査はかなり進んでおり、多くの調査報告書も書かれていますし、日本に滞在する僧侶も多く、森先生のところにも何人からのタイからの出家留学僧がおりますので、彼らからも聞き取り調査もしてまいりました。

後者はジャイナ教という、仏教とは異なった宗教でございますので、その調査結果をすぐさま仏教に適用することはできません。しかしおそらく釈尊は最初のうちは、ジャイナ教の出家者と共通するような生活様式を持っていたであろうと考えられますから、これを調査することは、文献には記されていない最初期の釈尊の生活とその教団の有りようを知るうえで、貴重な材料を与えてくれるかも知れません。また釈尊と同じ風土のもとに、その生活方法を釈尊の時代から連綿と断絶することなく続けてきたという連続性は何ものにも代えがたいものであります。実際、雨期のあいだ遊行せず、１箇所に定住する雨安居の制度は、当時、仏教の比丘たちが雨期のあいだも遊行して一根の命を害し、小さな生命を殺すという批判から外道にならって制定されたものでありますし（「入雨安居犍度」）、月に２回、戒律に悖るところがなかったか反省する布薩と呼ばれる行事も、マガダ国のビンビサーラ王が釈尊のもとに来て、外道梵志たちが行なっている集会の習慣を勧めて、仏教に取り入れられたものであります（「布薩犍度」）。

そこで今回は後者を選んで、森先生の命によりまして、2005 年９月７日から 10 月５日の約１ヶ月間、「裸形であること」「手を鉢にすること」など、ジャイナ教のなかでもより古い生活様式を堅持するディガンバラ派のムニに対する現地密着取材を行なうことになったわけでございます。

【仏教とジャイナ教】

釈尊の成道前の苦行はつぎのようなものでした。*MN*.12「師子吼大経」によりますと、釈尊は、29 歳に出家して（＊年齢は入胎から。入胎は 4 月 15 日（アーサールハ月の満月の日））、成道するまでの６年 10 ヶ月の間、裸行（acelaka）であったり、魚肉を食せず（na macchaṃ na maṃsaṃ pivāmi）、ただ野菜（sākabhakkha）や、森の木の根・果実を食べること（vanamūlaphalāhāra）や、自然に落ちた果実を食し（pavattaphalabhojin）、断食行を行い、死体が着ていた衣服（chavadussa）や、糞掃衣（paṃsukūla）、鹿皮の衣（ajina）、樹皮の衣（vākacīra）、人の髪の毛を編んだ衣（kesakambala）を着、髪や鬚を引き抜き（kesamassulocaka）、常に立つ行を行って（ubbhaṭṭhaka）坐らず（āsana-paṭikkhitta）、一日に三回沐浴し（sāya-tatiyaka udakarohaṇa）、塵垢にまみれ、鹿が人を見て森から森に逃げ回るように人から逃げ回って孤独の行を行い、自分の糞尿を喰い、死体や骸骨を敷いて床座としたなどの、さまざまな苦行をした、とされております。

これらの修行のうち、「裸形」であることや、「魚肉を食べないこと」、「断食行」を行なったり、「（剃刀を使わず）髪や鬚を引き抜」いたりすることは、現在、ジャイナ教のディガンバラ派のムニが日常、行なっていることでございますし、「直立行者」としての修行法もジャイナ教のムニの修行法であります（MN.14「小苦蘊経」vol.Ⅰ， p.92)。

釈尊成道後、最初期の仏教教団は先に申しましたように、他の諸宗派とあまり違わない生活様式をもっていたと考えられます。仏教が諸宗派のなかで淘汰されず、仏教が「仏教」になるプロセスでいかに差別化をはかっていったか、その姿勢は、仏典のなかでもとりわけ律蔵のなかに顕著に見えます。律蔵のなかで禁止され棄却される諸々の生活様式が６人の自由思想家、六師外道の１人のマッカリ・ゴーサーラ率いる（裸形の）アージーヴィカ教徒のそれであったり、ジャイナ教徒のそれであったりすることは、逆にそれらを含めてみるならば、インドの風土や宗教的文化を背景にして初期の釈尊教団の有りようが鮮明に見えてくるようにも思います。

【ジャイナ教概観】

ところで、ジャイナ教は山崎守一先生のご専門で、したがってジャイナ教についてのお話しはすでにお聞きになっているかも知れませんが、私たちが調査してきたディガンバラ派については余りご存知ないと思いますので、最初にごく簡単にご説明申し上げておこうと存じます。

ジャイナ教は釈尊とほぼ同じ時代にマハーヴィーラによって創設され、今日も連綿とインドに残っている宗教です。最近（1981 年）の統計では信者数は 320 万人で、全インドの人口の 0.5 パーセントに満たないこのジャイナ教徒が、仏教徒よりも少ないとはいうものの、19 世紀にいたるまで、民族資本の大部分を握るというほどの経済的な力を持っておりました。生きものを傷つけないアヒンサー＝不殺生などの誓いを厳格に守っておりますので、農業活動に従事せず、主に商業活動に従事したからです。マハーヴィーラ（Mahāvīra、「偉大な英雄」の意）は通称で、本名はヴァルダマーナ（Vardhamāna、「栄える者」の意）といいます。マハーヴィーラは（釈尊が最後に雨安居をされた）ガンジズ河の少し北にあるヴェーサーリーの近郊のクンダ村で、クシャトリヤの両親より生れます。若くしてヤショーダラーという奥さんをもらうとする派もありますが､われわれの調査したディガンバラ派では結婚の伝承を認めていません。30 歳の時にニガンタ派の修行者のなかに出家し、12 年間の苦行の末、完全知を得たとされています。そして 30 年間の教化活動の後、72 歳でナーランダー近郊の Pāvā（現在の Pavapuri）で亡くなったとされています。

パーリの仏典では、６人の自由思想家、六師外道の１人としてマハーヴィーラのことをニガンタ・ナータプッタと呼称します。ニガンタ（Nigaṇṭha, Skt. nirgrantha）とは、「繋縛を離れた者」という意味でございまして、仏教よりも前からあった宗教の名前です。漢訳では「離繋」、音写して「尼乾子」といったりします。ジャイナ教では仏教でいう過去仏を説きます。マ

ハーヴィーラを第 24 祖として、それ以前には 23 人の祖師＝ティールタンカラ（Tīrthaṅkara、「渡し場を作った人」の意）がいたとしています。23 番目はパールシュヴァ（通称パーサ）といいます。マハーヴィーラより 250 年前に涅槃した実在の人物とみられており、ニガンタ派とは実質的にはパールシュヴァを祖とする宗教であり、マハーヴィーラはその改革者であったとされています。その改革は急激なものではなく一時的にも両派が混在していたことは明らかとされており（谷川泰教「原始ジャイナ教」）、それはちょうどわれわれが研究する釈尊の教化活動の時代に重なっております。

パールシュヴァ派とマハーヴィーラ派の違いは、ジャイナ教の聖典（『ウッタラジャーヤー』23 章）によると、パールシュヴァ派が四種の禁戒を説くのに対し、マハーヴィーラ派が五大誓戒を説き、パールシュヴァ派が着衣を容認したのに対し、マハーヴィーラ派は裸形を説いたという 2 点のみで、他に教義上の違いはなかったとされています。マハーヴィーラ教団が成立して、教団が拡大していきますと、マハーヴィーラは教団の運営のために 9 つのガナに分け、それにガナダラ（gaṇadhara、学頭）という長を設けて統括させたといわれています。マハーヴィーラの在世中にも 2 回の分裂があったとされていますが、その死後 100 年くらいたった紀元前 3 世紀のころにはマガダ国の飢饉を避けて、南インドへ移住した厳格な組と一部着衣を認める残留組とで意見の相違が生じました。それを一つの萌芽として、紀元 1 世紀ころには 8 回目の分裂が起き、着衣を認める白衣（Śvetāmbara）派（最後に一切智を得た Sudharman の系譜）と空を衣とする空衣（裸形、Digambara）派（最初のガナダラ、Gautama Indrabhūti の系譜）とに分かれました。

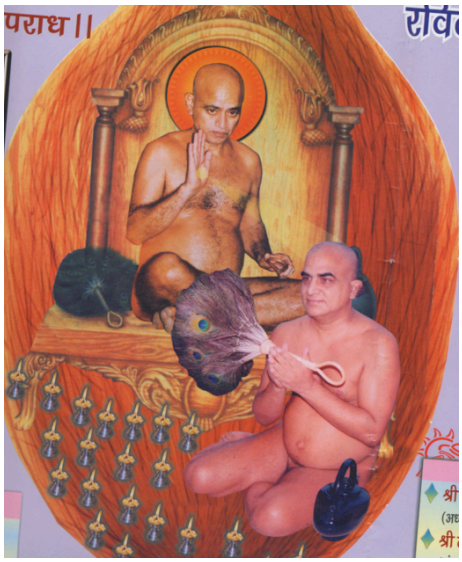
空白両派の差異は、つぎのようになります。

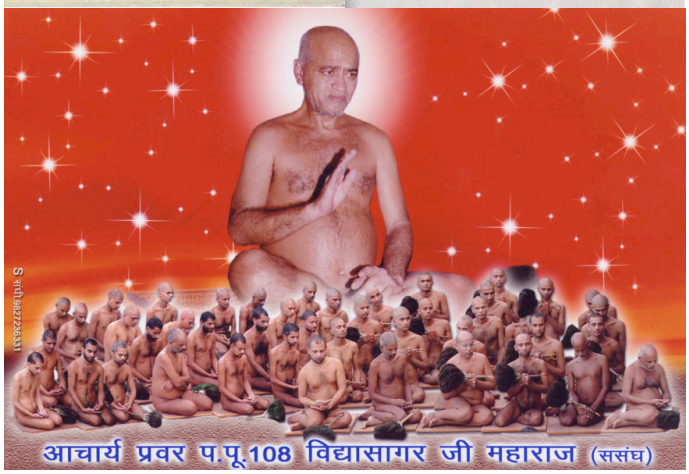
Digambara（空衣、裸形）派		Śvetāmbara（白衣）派
(1) 完全智を得たものは食事をとらない	⇔	とる
(2) 裸形は解脱に不可欠	⇔	任意
(3) 女人の解脱の否定	⇔	容認
(4) 第 19 祖マッリナータを男性とする	⇔	女性とする
(5) 生涯独身	⇔	ヤショーダラーと結婚、娘アノッジャーをもうける
(6) マハーヴィーラの古伝承は散逸したとし、白衣派の編集した聖典の権威を認めない	⇔	編集された聖典の中に保存

簡単にいえば、ディガンバラ派は厳格主義で、Śvetāmbara 派は穏健派であり、一般的には裸行派の方が保守派で、白衣派の方が革新派と呼ばれています。われわれが今回裸行派を調査したのは、こちらの方に伝統がよりよく保存されていると考えたからです。

【調査方法】

現在、ディガンバラ派での出家生活者は取材のなかの情報で 1008 人ともいいます。われわれが 2005 年版の出家者の雨安居滞在地を記入した冊子





『サンスカーラ』（写真左上）で把握できる個人名を整理いたしますと、男女合わせて 938 名であります。われわれが取材したサンガは１つのサンガとしてはディガンバラ派のなかでは最大の Ācārya Vidyāsāgara のサンガで、現在 212 名です。取材できましたのは、Madhyapradesh 州 Sagar 県 Bīnā-bārahā 村の Ācārya Vidyāsāgara のサンガの本体 51 人のムニサンガ（写真左下）と、Ācārya Vidyāsāgara の指示を受けて Delhi、Preet Vihar で宗教行事と布教活動に従事されている Upādhyāya Guptisāgara（写真右上）の生活でございまして、１ヶ月の調査期間では他を巡ってくることは適いませんでした。

取材のなかで十数時間のデジタル映像と数百枚の写真は貴重な資料となろうと思う半面、帰国後、文献を手に取りながらできるだけ客観的、普遍的であるよう心がけようといたしましたが、ディガンバラ派の研究、調査報告はあまりなされておりません。したがいまして果たしてこれが、現代の裸行派のもっとも典型的で一般的なものであるかどうかということを確認することはできません。現在ディガンバラ派のなかで一番勢いのある（Terapanthī 派の）Ācārya Vidyāsāgara のサンガについての事例調査であるというふうにお考えいただきたいと思います。

またこれから、この事例調査をもとにして、仏教がどのようにしてこれらの同じ沙門主義の

宗教との差別化をはかり仏教となっていったか、見てまいりたいと思いますが、現在の裸行派の生活様式が釈尊時代のニガンタ派の生活様式であったということももちろんできません。そこで文献なども参照しながら、できるだけ誤りのないように注意していきたいと思いますが、これにも限度があるということもぜひご承知おきいただきたいと存じます。

【調査協力者】

われわれをインドで出迎えたのは Rajiv RANA という通訳でありました（写真の右は岩井昌悟調査担当者）。彼はダラムサーラでダライラマとの通訳の仕事を終え、会社より資料を渡されたその足で来たようです。事前に知らされていたガイドとは別人であったということで面食らいましたが、お世辞抜きに優秀な通訳でした。ネール大学で日本学を修め、インド人であるのに子供の時分よりチャイを飲まず、志村けんのバカ殿様のファンであるといった変わり者でありましたが、日本語表現の諸相にうまく対応できました。彼はだんだんにわれわれの調査目的を理解し、自ら興味をもって率先して現地のジャイナ教徒と接触し、われわれに有益な情報をもたらしてくれました。またわれわれはインタヴューを行う際、IC レコーダーを利用してその会話を録音していましたが、宿に戻ってはこの「テープ起し」にも協力してもらい、ヒンディー語のスペルや簡略した通訳部分など、日本から持ち込んだノートパソコンを前に岩井先生を中心にインタヴュー内容を復元する時間を設けていました。その作業は午後７時、８時になることもありました。ここに調査協力者として Rajiv RANA 氏の名を挙げ、彼の労をねぎらいたいと思います。

【日程】

さて、以下、簡単に今回のわれわれのジャイナ教調査の行程をご説明申し上げておきたいと存じます。

資料１：〈行程表〉

日　　時	行　　定

①9 月 7 日（水）	午後 8 時、Delhi 空港着
②9 月 8 日（木）-17 日（土）	ジャイナ教 Digambara （裸行）派の宗教行事、Daśa-lakṣaṇa parvan の取材、Upādhyāya Guptisāgara 聴き取り（調査地：Delhi、Preet Vihar） ※この寺院に滞在中のジャイナ教 Digambara 派のムニが現地の旅行代理店の社長の友人の父親と親しいとのことで、そのツテを頼ってみることにした。社長の友人の父親、Harish Chand Jain 氏と逗留中の Upādhyāya Guptisāgara-jī（先の写真参照）には、たいへんお世話になる。われわれがインドへ着いたときは、ジャイナ教徒のもっとも重要な宗教行事の行われていた時期でもあり、多くの在家の信者がムニのもとに押しかける。
③9 月 18 日（日）	Digambara 派 kṣamā-vanī の取材（調査地：Delhi、Preet Vihar） ※仏教でいうならば自恣に相当するが、これはジャイナ教在家信者のための儀式。
④9 月 19 日（月）	Guptisāgara Dham Trust の取材（調査地：Haryana 州 Gannaur） ※Guptisāgara の熱烈なファンクラブによる寺院を中心にした図書館、学校、病院などの施設の建設地。
⑤9 月 20 日（火）	Sagar への経由地、Sonāgiri のジャイナ寺院群での取材（場所：Madhya-pradesh 州 Sonāgiri） ※Digambara の Terapanthī 派の簡易宿泊所（ダルマサーラ）に泊まる。このようなジャイナ教信者のための施設がインド中にあるとのこと。Delhi から Guptisāgara-jī の指示で 2 人のジャーナリストの兄弟が案内役で同行、兄の Narendra Jain 氏が食事に 250 ルピー、施設に 150 ルピーの寄付をして来たよう（その領収証をもらい、こちらで持ちました）。運転手、通訳を含め大の大人 6 人分で、日本円で千円ちょっと。
⑥9 月 21 日（水）-27 日（火）	Śrī Digambara Jaina Atiśaya Kṣetra で Cāturmās を過ごす Ācārya Vidyāsāgara Saṃgha の取材（調査地：Madhyapradesh 州 Sagar 県 Bīnā-bārahā 村） ※食事は Delhi の Harish Chand Jain 氏より Vidyāsāgara Saṃgha の最大の施主（ダーナ・パティ）、Om Prakash Jain 氏を紹介してもらい、氏のお世話になる。

⑦9 月 28 日（水）-30 日（金）	Delhi への帰路、Śvetāmbara（白衣）派の寺院調査、テープ起し（Agra） ※Delhi への中継点、Bīnā-bārahā 村から 490ｋｍの Agra に夜遅くに着き 3 泊。ここでは初めての休暇日をもうけ、それから Śvetāmbara 派の寺院調査、「テープ起し」などをして過ごす。
⑧10 月 1 日（土）-3 日（月）	Upādhyāya Guptisāgara 聴き取り、ジャイナ関連文献の収集、Śvetāmbara の寺院調査（調査地：Delhi、Preet Vihar） ※Delhi へ着いたその足で、Guptisāgara Muni Maharāj のもとへ挨拶とご報告に赴き、この日から 3 日（月）まで再び日参、調査項目で聞きそびれたことや新たな疑問点など、時間の許す範囲での質疑応答、ジャイナ教関連の文献の渉猟。
⑨10 月 4 日（火）	インド出立～
⑩10 月 5 日（水）	午前 8 時、成田空港着

［調査項目］

われわれは出発前に森先生を中心とする研究会で洗い出した質問覚え書といった B5 版で 3 ページくらいの調査項目をそばにおいて、できるだけインド滞在期間中にこれらが全部埋まるようにムニとの面会を行なっていました。そのすべてについて本日の限られた時間のなかでお話しすることはできませんし、実際にはいまだによく分からないこともございます。また日本語になったことのないテクニカル・タームや欧文でも報告されていないことで、細かな取材ができたところもございます。それはジャイナ教ディガンバラ派の調査としては有益であったにしても、詳細過ぎる部分は本日は割愛し、仏教と比較しやすいところなどをピックアップしながら、またフィールドワークですから現地独特の面白さや雰囲気の伝わるものを拾いつつ、お話しを進めたいと存じます。学術的にも興味深いものでありましても、何しろ真っ裸の修行者が相手でありますから、本日は映像処理の問題から控えさせていただきました。それは後日、「見たい」といっていただければ、解説つきでお見せすることも可能かと存じます。

また細心の注意を払って資料を準備したつもりでおりますが、不備などがありました場合、目をつぶってご寛恕いただきますよう、お願い申し上げます。

【サンガの構成員】

さて、まずサンガの構成員についてみてみたいと存じます。

ジャイナ教のサンガは４種のサンガ（Caturvidhasaṅgha）より構成されています。現在の

Digambara（裸形）派の名称としては、１．Sādhu（muni）、２．Sādhvī（āryikā）、３．Śrāvaka、４．Śrāvikā となります。

これは仏教でいうならば、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷という分類に相当いたします。Śrāvaka の原意は、「教えを聞く人」でありますが、仏教で Śrāvaka といえば、声聞と訳されている言葉です。

ジャイナの広義の教団は上記４種の内でも Sādhu（muni）、Sādhvī（āryikā）の出家集団と Śrāvaka、Śrāvikā の在家集団に分けられます。

出家者は１．不殺生、２．不妄語、３．不盗、４．不婬、５．無所有の大誓戒（mahāvrata）を守りますし、在家信者は大誓戒（mahāvrata）を守りやすくした小誓戒（anuvrata）にしたがった生活を心がけます。すなわち、１．生命を傷つけるほどの粗暴な行為をしない、２．不実を語らない、３．盗みをしない、４．妻で満足する、５．所有欲を抑える、などといったものです。

つぎに、在家者から出家者、muni への階梯がどのようになっているかみてまいりたいと思います。

【出家者の種類】

（1）呼び方：

ジャイナ教ディガンバラ派の正式な出家者はsādhuもしくはmuniと呼ばれる男性出家者で、五大誓戒を受け入れる前の出家生活者として、Āryikā と呼ばれる女性の出家者、男性の Ailaka、男性の Kṣullaka、女性の Kṣullikā がいます。仏教でいえば、sādhu もしくは muni が比丘で、その他の者は見習い出家者としての沙弥とか沙弥尼にあたるでしょう。

そしてまだ在家者に位置づけられていますが、男性の Brahmacārī、女性の Brahmacārinī の段階があります。brahmacarya-vrata（ブラフマチャーリーの誓い）を立てることによって出家集団と交わり、聖典を学習しながら出家者に仕えます。非僧非俗の修行者といってよいでしょうか。

ディガンバラ派では五大誓戒（mahāvrata）を受け入れてムニは裸形となりますが、裸形となり得ない女性は今生では解脱ができないとされています。そこで女性の正式の出家修行者はいないわけです。

また重病人や身体障害者、犯罪者などは出家できません。（渡辺［2005］p.246 によると）性的不能者、若すぎる人（取材では：規定は 8 歳以上、しかし実際は 13 歳以上とも）、年寄り過ぎる人、自制できない人、妊婦、幼児を連れた女性などには、出家の許可が出ないようです。後で詳しく述べますが、ディガンバラ派のムニは立って両手で食事を受けて食べなければならないとされていますが、このムニのグナ（徳目）が保てないためのようです。釈尊時代の仏教

にも、出家することが禁止されている十遮・十三難とよばれる 23 種類もの人たちがおり、重病人や身体障害者、犯罪者などもこの中に含まれております。

仏教では、

十三難＝出家資格のない者。誤って出家させてしまった場合は還俗させられる。

⑴犯辺罪、⑵犯比丘尼、⑶賊心受戒、⑷破内外道、⑸黄門、⑹殺父、⑺殺母、⑻殺阿羅漢、⑼破僧、⑽出仏身血、⑾非人（龍・鬼など）、⑿畜生、⒀二形

十遮＝出家条件の整わない者。誤って出家した場合は残ることができる。ただし出家させた者は突吉羅罪。

⑴姓名、⑵和尚の字、⑶満二十、⑷衣と鉢、⑸父と母、⑹負債、⑺奴隷、⑻官人、⑼丈夫、⑽癩、癰、白癩、乾瘠、癲狂

（2）服装：

つぎにその服装についてみてみたいと思います。

非僧非俗の修行者である **Brahmacārī/Barhmacāriṇī**：最初の写真はわれわれがお世話になった Gupti-sagara-jī maharāja が Brahmacārī になった時のもの（写真左）で３衣が許されています。女性は Delhi で同じくお世話になった Brahmacārinī、Suman Shastri さんと Ranjana さん（写真下）で、サリーとブラウスとペティコートの３枚です。

見習い出家者としての **Kṣullaka/Kṣullikā**：服装は、男性は下着と肩掛（写真左　本によっては外套が２枚許されている、とも）、女性は２衣ということでした。写真は『マハーヨーギー・グプティサーガラ』より使わせていただいていますが、下着姿で肩に衣をかけているのが、チュラックになります。

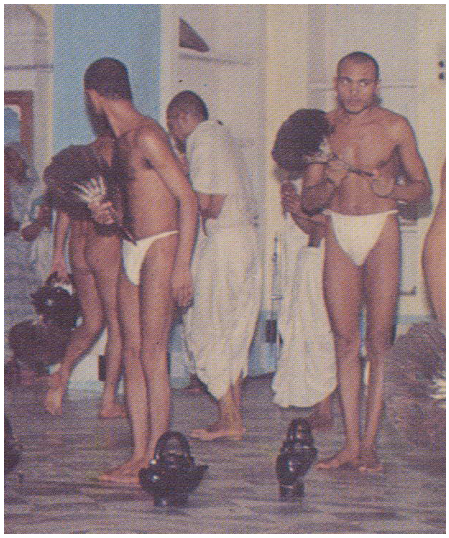
Brahmacārī の 11 段階目のステージが「在家者の放棄」（pratimā）の最初の段階となり、チュラック、チュッリカーと呼んでいます。

５つの小誓戒（anuvrata）、徳に関する３つの誓戒（guṇavrata）¨(＊1)、学びの４つの誓戒（śikasāvrata）(＊2)、および「在家者の放棄」（pratimā）に同意して誓うことになります。これは先の一般在家者の場合より厳格に考えられているようです。Kṣullaka の dīkṣā の際には冠などを着けてきれいに化粧をして、立派な衣裳を着けて臨むとのことでした。Ailaka の時は特別の事はしないそうです。

(1) guṇavrata：１．動く場所に関する制限、２．衣類・道具に関する制限、３．罪を犯さぬ努力
(2) śikasāvrata：１．samayaka、最低１時間の冥想、２．anuvrata と guṇavrata の合計８つを一定の期間、特に厳守、３．最低１年に一度の断食、４．修行者への飲食などの布施

ちなみに彼らはここで出家生活者の用具であるクジャク箒（piñchī）と水瓶（kamaṇḍalu）を与えられます。

見習い出家者の中の格上の **Ailaka**：男性はチュラックの時の外套もしくは肩掛を捨てて下着１枚となります（写真下　参照）。Ailaka は 11 段階のステージの第２番目という言い方がされています。



Āryikā：女性は 16 肘（hasth）の長さ（約 40 センチ×16=6.4m）の白い衣をサリーとして１枚身に付けます。女性には Āryikā の上はありません。Digambara 派は裸形になりえない女性の限界としてしているわけです。

Muni：裸形です（写真下　参照）。ācārya

から許可がでるならば、muni-dīkṣā を受け、５つの大誓戒（mahāvrata）を受け入れ、裸形となり、muni となります。最後の衣を取り去ることは５大誓戒の最後の無所有の象徴的な行為のように言われています。Brahmacārī から一足飛びにムニになることもあるようです。

また muni には 28 の徳目、グナ（guṇa）があるとします。大ざっぱな括りでは、先の五大誓戒を守ること（1-5）、５つの用心をすること（6-10）、５つの感官の制御を行うこと（11-15）、６つの āvaśyakas を行うこと（16-21）、抜毛すること（22）、裸でいること（23）、沐浴しないこと（24）、地面に寝ること（25）、歯を磨かぬこと（26）、立食すること（27）、一定時間に食事をすること（28）、になります（cf.奥田清明「Mūlācāra 第１章」『印仏研』44、1974）。

仏教では、律蔵の「受戒犍度」のなかに、衣を持たずに出家した者の話しがでます。裸形で歩き、在家者より「外道の如し」と非難されたことにより、衣を持たない者は出家を禁止され、

出家させた者は悪作に堕す、と制定されました。また食事の準備が整ったことを知らせに来た在家の女性信者として有名なヴィサーカー・ミガーラマーターの下女が、裸で雨浴していた仏弟子たちを（雨をシャワー代わりに利用していたわけですが)、裸形の外道と間違えてしまうということがあり、釈尊によって裸での雨浴が禁じられます。そこで雨浴衣の使用が定められます。仏教では沐浴するときもそうですが、他の修行者に間違われぬよう裸形であることを禁止しているわけです。

【僧階】

僧階としては Muni、Upādhyāya、Ācārya の階位があるようです。muni は釈迦牟尼の「牟尼」で「聖者」という意味になります。Upādhyāya は仏教では「和尚」にあたる言葉で、Ācārya は「阿闍梨」にあたる言葉です。釈尊が定められた戒律では、新入弟子は共住弟子(saddhivihārika, saddhivihārin）として和尚（upajjhāya）に 10 年間依止しなければならないとされており、この和尚に何らかの事故があったときに代わって指導する師匠が阿闍梨です。この仏教の用い方とはディガンバラ派のこれは違うように思いましたが、この２つの言葉は釈尊時代の他の宗教では、違った意味でも使われていたようです。

われわれがお世話になることになったこのムニは、Upādhyāya、śrī Guptisāgara mahārāja（1957-）と呼ばれていました。Upādhyāya は Ācārya を含むムニの集団の中で、学識の点で優れたものに与えられる称号のようです。また男性の Ācārya に対応するものとして Gaṇinī という女性の位があります。

Gaṇinī は男性にも出家の muni-dīkṣā を授けることが可能であるとのことでした。

また *Historical Dictionary of Jainism*（2004）には、ディガンバラ派には Upādhyāya の階位がもはや存在していないように書いてありますが、Gupti-sāgara-jī を始めとして、Jñāna-sāgara-jī、Śruta-sāgara-jī、Nayana-sāgara-jī の４人の Upādhyāya が確認できています。

Guptisāgara は Ācārya、Vidyāsāgara のもとで muni-dīkṣā を授けられムニとなり、その精神的な紐帯は仏教の和尚と弟子の関係にあるよう見受けられました。一方、upādhyāya-dīkṣā は、ディガンバラ派のなかの長老で、別のサンガの Ācārya、Vidyānanda-jī より授かったと聞きました。この写真は 4 年ほど前の平成 13 年の夏に、森先生にお供して雨期の調査にインドに行かせていただいたときに、ニューデリーのジャイナ教のお寺に聞き取り調査に行って、その時に撮ったものです。

Upādhyāya Guptisāgara は 1957 年に生れ、1982 年（25 歳）にムニになりました。そしてムニになってから 12 年間アーチャーリヤの知識を学び終えるまで仕え（その期間は規則にはよってはいないとのことでしたが)、Upādhyāya となり、自由にムニを指導できる立場になったとのことでした。仏教でも出家して 10 年経ったら、だれでも和尚になれるというわけでありません。阿羅漢にならなければならないなどと難しいことが書いてありますが、ある一定の学

識と境地に達することが要求されていたようです。その資格の授与式については記述がありませんが、それにあたるのかも知れません。

【寺院の土地・建物の所有権と管理】

寺院の土地・建物の所有権は誰に帰属しているか、寺院の管理責任者はどのような人か、寺院運営に係わる在家信者の役割はどのようなものか、聞いてみました。

パンジャーブ(Punjab)州のチャンディーガル(Chandigarh)から来た噛み煙草の商人のSatish Kumar Jain（55 歳　写真左）さん（9/10）やDelhi の Preet vihar の Suresh Jain (48 歳　写真右）さん（9/12）等によりますと、寺院の所有権については、寄付を募って土地を買い、寺院を建てているので、だれかの持ち物というものではない、とのことでした。その運営は、２年あるいは３年に１度の選挙などによってcommittee を選出し、会長や書記、会計、ストア・マネージャーなどの役員を決め、管理にあたるとのことでした。

チャンディーガルでは毎年 101 ルピー、日本円で 260 円ちょっと（263 円 50 銭：2006 年 1 月 17 日現在）を会費として支払い、それと献金箱のお金とを合わせて、寺院のガードマンや清掃人、あるいは光熱費などに充てるということです。Delhi の Preet Vihar でもプージャー（礼拝と供養）の信者さんが捧げる米やココナツなどの供物はそこで下働きする人たちの賃金になるということでした。このように原則、ムニは寺院の管理・運営を在家信者に委任されているようです。釈尊時代の仏教寺院もそうではなかったかと思います。お坊さんはお金などを手にすることはできませんし、実際に自らの手で、金槌やのこぎりを持ったりすることはありませんでした。しかし監督責任者はもちろんお坊さんです。

われわれは Guptisāgara-Dham Trust を取材してきましたが（9/19 日)、ムニのための僧坊や一般信者のための宿坊、図書館、アーユルヴェーダによる病院、学校などを建設中でした。われわれが Delhi でお世話になった Harish Chand Jain さんは Guptisāgara ムニの最初の信者さんでありますが、そのような信者さんによるファンクラブのネットワークで寺院施設の建築が行われているわけです。ただこの施設は Guptisāgara ムニだけが使用するものではありません。仏教の祇園精舎などは給孤独長者によって仏教の四方サンガに寄進されたように、他のジャイナ教徒にも利用できるものです。しかし、仏教でも特定の精舎を特定の比丘に寄進する話しがありますし、釈尊とその弟子のサンガに食事を供するといってもそのなかの特に目連（Mahāmoggallāna）の奉仕者（upaṭṭhāka）であるような優婆塞の存在も知られています（*Udāna*

p.16)。Guptisāgara-Dham Trust ができるように、個々の出家者に対する敬信、あるいは偏愛というものがあって信者を増やし、教えを広めていったのであろうことがうかがわれます。ビナバラ村の 51 人のムニ・サンガは若いムニも多く、またブロマイドよろしくムニの写真も販売していました。

ビナバラ村の崩壊寸前の寺院にディガンバラ派の最大人気のサンガがやってまいりますと団体参拝の現象がおこります。Ācārya Vidyāsāgara による説法大会に向けて、寺院再建の寄付が募られ、寄付金の最高額は石炭業を営む会社社長の１千万ルピー、日本円で２千６百万円の寄付が最高額のようでした。

１人のムニの名を冠した Guptisāgara-Dham Trust は別にいたしまして、寺院というものはやはり聖と俗の接点でありながら、そのままではうつろな空間のように見えました。いわばロウソクの燭台のように、コミュニティの信者さんたちが宗教行事の折々にムニを招待することによって始めて聖なる灯火がともされる、そのような空間に思えました。

【１年の過ごし方】

インドの出家者たちは季節によりまして生活のスタイル、リズムを変えていました。ジャイナ教も南方上座部仏教と同様に１年を生活のスタイルから大きく大別すると、遊行期と雨安居期ということに分けられます。遊行は一箇所に定住しないで、一所不住の生活をすることですが、雨安居は雨期の期間の定住で、仏教の規定では一定区域内から外に出てはならないとされています。

【雨安居】

ジャイナ教のディガンバラ派では現在、雨安居のことを cāturmāsa（チャトルマース）と呼んでいます。この原意は「四ヶ月」ですが、昨年は 7 月 20 日～11 月 1 日にあたりました。正確には３ヶ月半になります。衣を着るシュヴェーターンバラ派では、11 月 14、5 日までですので、こちらは４ヶ月間ということになります。

また、このような日にちの算定には仏教でもジャイナ教でも、昔から太陽太陰暦を用いておりました。現代では Pañcāṅga というインド独特の暦を用いますが、仏教では 4 ヶ月の雨安居を過ごした場合の自恣（雨安居の最終日で、古代中国の暦で 8 月 15 日に相当し、これがお盆の日に相当します）がカッティカ月の満月の日になります。Digambara 派の Pañcāṅga を見ますと、マハーヴィーラの大涅槃（一年の終わり＝カッティカ月の新月の日）の翌日（カッティカ月の白分の第一日）が一年の初日です。このようなことがあって、雨安居が 3 ヶ月半になっているのではないかと思います。

それはともかく、雨安居の風習は仏教とジャイナ教と共通していたことは明らかです。

雨安居の目的は？

このようなチャトルマースが規定されたのは、仏教の雨安居の因縁譚のようにジャイナ教でも、この時期には自然のなかに生命が驚異的に増えるから、歩き回ってそれを傷つけるのを忌避してのものです。しかし、じっさいインドでは、７月からすでに降水量が多く、チャトルマースに入る時期が遅いように思われます。これは白衣派の聖典（『カルパスートラ』）によるとマハーヴィーラの時代から、「在家者たちが雨のために壁塗りをしたり床に藁を敷いたり溝を掘ったりすることを一通り終える」１ヶ月と 20 日間過ぎてから雨安居に入ったためとしているようです。ディガンバラ派のあるムニは「雨が降ってもすぐには新芽が出ない、しばらくしてから芽がでるので」と季節のズレを説明していました。

界の規定はあるか？

仏教の規定では、雨安居中は「一定区域内から外に出てはならない」と申しましたが、この区域のことを「界」といいます。インド語ではシーマーでありまして、「俺のシマを荒らすな」という時の「シマ」です。要するに縄張りです。ジャイナ教ではこの間、界の広さを６ｋｍ（1kos 1/4 由旬　※研究者リーダーズでは、インドの距離単位は 3.4ｋｍとなっているが？）としてその外に出ることはできない規定があるとのことでした。仏教では最大が 3 由旬とされていますが、これはこれよりも大きくしてはならないという制限ですから、平均的にはやはり 6 キロくらいではなかったでしょうか。1 由旬です。この範囲で、食事のお呼ばれに行くことはあるということです。また仏教でも非常時にはこの界の外に出てもよい場合の規則もありますが、この点、同様のようです。

どのようにして雨安居地を決定するのか？

Upādhyāya Guptisāgara-jī は Ācārya Vidyāsāgara-jī のサンガに属し、アーチャーリヤの指示のもと、デリーとハリヤナ州、パンジャーブ州を中心にジャイナ教の宗教行事と布教に携わっているとのことです。Ācārya のもとに信者さんからの懇請があり、Guptisāgara には Ācārya が二三の候補を示し、それにより決定するとのことでした。Vidyāsāgara のサンガが今回の雨安居をビーナ・バーラ村に定められたというのは唐突で、１週間まえまで遊行されていて、そばまで来られてそのまま cāturmāsa（チャトルマース）の四ヶ月を過ごされることになったということでした。お釈迦様もこのように在家信者さんから招待があり、それによって雨安居地を決められたのではないかと思います。祇園精舎は給孤独長者が舎衛城で雨安居をすごして下さいと要請して、そのために建設されたものです。

どのような場所に滞在するか？

仏教の僧院は、つぎのような建造物であったようです（公開シンポジウム「釈尊はどのような生活をされていたかーースマナサーラ長老とともに考える」基調報告資料）。

「町や村の近郊に、木材、石、日干しレンガ、泥と石灰などで立てられた僧院。屋根（chadana）

は瓦（iṭṭhakā）、石（silā）、石灰（sudhā）、草（tiṇa）、葉（paṇṇa）などで葺かれ、壁は白（setavaṇṇa）か、黒（kaḷavaṇṇa）か、赤く（赤土で作る　geruka-parikamma）塗られていた。2 階建てもあったし、尖塔のついたものもあった。大きな僧院には、坐禅などをする勤行堂（講堂）、お坊さんの個室としての僧房、食堂、殿堂（重閣 pāsāda）、布薩や会議をする集会堂、倉庫（蔵倉）、裁縫室（迦絺那堂）、経行堂などの施設があった。）

ちょうどわれわれがビナバラ村の Vidyāsāgara のサンガと 1 週間ほど寝起きを共にした寺院はこのような場所でした。

ただし、ジャイナ教は苦行的な修業であるところの仏教でいう頭陀行を行ないますので、古いジャイナ聖典に規定される住処の規定としては、「在家の人々と接触せずに、住家を持たずに遍歴すべきである（19）。墓場で、空家で、或は樹の根本で（修行者）は動かずに坐るべきである。そして他の者を脅かしてはいけない（20）。」（渡辺研二「Uttarajjhāyā の研究Ⅰ」『大正大学大学院研究論文集』創刊号　pp.240-241、*Uttaradhyayan Sūtara*, 23.29,S.B.E.45, p.12）とされています。

Delhi の Guptisāgara-jī はどうであったかといいますと、Preet vihar 寺院では僧の宿坊が建設中でまだ完成していないために、雨安居の期間、信者の Satendra Jain さんの家を完全にムニに明け渡されておりました。白衣派の資料では、この期間の在家の家の空間とその所有権をオーッガハ（oggaha）と呼ぶようでありますが、ムニの留まる宿舎はその持ち主や家族、奉公人の住むところであってはならず、家畜がやってきてはいけないとあります（渡辺研二［2005］p.254）。通った 2 週間の間、われわれもつい一度も Satendra Jain さん一家を見かけることはありませんでした。

雨安居中の宗教儀礼にはどのようなものがあるか？

ジャイナ教の在家信徒にとって 1 年でもっとも重要な宗教儀礼はパリューシャン儀礼（Paryūṣaṇa）です。この儀礼は日頃、出家者のようにジャイナ教の教えに従って生活することの困難な在家の人たちが、このときばかりは休みをとったりして、寺院に通い、勤行し、時

には断食、あるいは１食などを行なうもののようです。シュヴェーターンバラ派のこの儀礼は８日間で、それが終わった翌日にディガンバラ派の 10 日間のパリューシャン儀礼が始まります。ディガンバラ派のこの儀礼は今年はわれわれがインドに到着した翌日、９月８日より始まりました。ディガンバラ派では在家者の宗教生活で 10 の徳目を鼓舞するための儀礼であり、これをダシャ・ラクシャナ・パルヴァン（Daśa-lakṣaṇa parvan）とも呼んでいます。　その徳目は、以下になります。ディガンバラ派のムニが１日毎にそれぞれの内容で説法を行なっておりました。

「10 の徳目」（daśa-lakṣaṇa）：

１．kṣamā（忍耐）、２．mārdava（mṛdutā 柔和、謙虚）、３．ārjava（ṛjutā 正直、質直）、４．śauca（śucitā 清廉）、５．satya（真実、不妄語）、６．saṃyama（自制）、７．tapa（苦行）、８．tyāga（放棄）、９．ākiñcanya（無所有）、10．brahmacarya（梵行）

仏教にはこのような行事はありませんが、しかし中身は布薩そのものといってよいと思います。仏教の布薩は月の 8、14、15 日と 23 日、29 日、30 日の 6 斎日に行うもので、この日は一日出家者と同様の生活を行うことになっています。

デリーの Preet vihar 寺院は 1998 年（1999 年）に建設された寺院で、Guptisāgara さんが一種の開眼供養である‘pañcikalyāṇapratiṣṭhā’（寺院の新築に際して像を安置する儀礼）を行なっており、因縁深い寺院のようです。その儀式のときには寺守りとして地元の人から１人の brahmacārī を選出するとのことでした。今年は Paṇḍit Suresh Jain さん（BrahmacArin、11 の中第 7 の階梯、67 歳、奥さんも子供もいる。以前は服の商人だった。その仕事は、今は子供が嗣いでいると）です。

ここのコミュニティは Terāpanthī（Digambara）派に属し、寺院は Mahāvīra を本尊として安置していました。ディガンバラ派のセクトには、もう一つ Viśvapanthī（Bīsapanthī or Visāpanthī）がありますが、Terāpanthī 派はプージャーの時の供物に花や果物、白檀を用いないということのようです。彼らは、白檀の代用としてサフランを用い、花の代わりにはサフランの水溶液で着色した白米を、果物の代わりにはアーモンドやチョウジ、時には乾燥レーズンを使用しています。

この 10 日間のダシャ・ラクシャナ儀礼（Daśa-lakṣaṇa parvan）の終わった翌日にチ

ャマーヴァニー（kṣamā-vanī）という儀式を行ないます。これは仏教の自恣（Skt., pravāraṇā, Pāli, pavāraṇā）に対応するものですが、ジャイナ教では完全に在家信者のための儀式となっています。仏教の自恣は雨安居が終わった最終の日に出家修行僧が他の修行僧に、雨安居の期間に戒律に悖るところがなかったかを自由に指摘してもらう儀式ですが、チャマーヴァニー（kṣamā-vanī）の意味は、（Guptisāgara-jī による）、

（1）ムニの世話をする在家信者が知らず知らずにムニに対して罪を犯していたならば、その許しを請う、

（2）在家信者同士が心の問題をお互いに告白しあい、許し合う、

（3）ダシャ・ラクシャナ儀礼を敬虔に過ごし、断食を続けた信者を褒め称える、

（4）kṣamā-vanī のカード（手紙）を信者同士贈り合って、会えない人に懺悔し、許し合う、

というものでした。

この儀式の後に、外で楽隊の演奏が始まり、ムニを先頭に王子のように着飾った少年たちのパレードへと移っていきました。

【遊行】

遊行は‘pada-vihara’という言葉を使っています。

ジャイナ教の白衣（Śvetāmbara）派のもっとも重要な聖典の１つ、カルパスートラにはマハーヴィーラ伝が含まれておりますが、そこには「尊者は雨期を除き、夏冬８ヶ月の内、村落に住むのは僅かに１夜、都市に寝るのは僅かに５夜のみである」（119 偈）とあります。

そこで、ディガンバラ派のムニに対して、遊行期間での「1 日の中で歩く時間帯」、「滞在日数の限度」、……などについて質問しました。

Arahasāgara ムニの回答（9/24 日）では、天気によって違いはするが、夏は１日のうちの遊行時間はだいたい午前５時から午前７時、そ

のペースは１人２人であるならば速く行くことも可能であるが、50 人のサンガともなると、おのずとペースは遅くなるとのことでした。午後は５時から６時のあいだ遊行するとのことでした。午前２時間、午後１時間で１日３時間くらい歩いていることになります。ただムニは１人で歩いてはならず、かならず誰かがついて（在家の人でも可）遊行いたします。冬は日の出が遅いこともあり、（虫を踏み殺さないため）明るくなった午前７時 30 分から 10 時のあいだの２時間半、午後は４時から６時のあいだの２時間遊行するので、冬場は４時間半くらい歩くことになります。インドでは冬場の方が気候がよいので、あるく時間も長くなるということでしょう。一般に人の歩く速さは時速４ｋｍ/h ですので、これをもとにいたしますと、夏場は 12 ｋｍ、冬場は 18ｋｍ移動することになります。われわれの釈尊伝研究でも、お釈迦様は 1 日に大体 11.5 キロくらいを遊行されたのではないかと想像しています。かね尺と鯨尺（くじらじゃく）が同じ尺でも違うように、由旬は使われる場合によって長さが違いますが、これも１由旬です。

良いところがあれば、１ヶ月から２ヶ月でも留まることがあるといいます。Ācārya がある本を教えたいというので、遊行期でも４ヶ月、１ヶ所に留まったこともあると言っていました。

Kunthusāgara ムニからの聴き取り（9/26 日）では、ディガンバラ派のムニの守るべき規則については *Mūlācāra* に出ているが、聖典は昔のものであるので、現状に合わなくなったところをその精神で現代に当てはめて Ācārya が解釈し、指導すると言っていました。遊行の目的については、「同じところに留まれば、水は濁るし、腐る、同様に、情も移り、情が湧く、人も同様である」と遊行の目的を説明しておりました。

長期の遊行としては Ācārya の許可がでるならば、ティールタンカラ（ジャイナ教の聖者）の涅槃の地への巡礼などに出ることもあるとのことでした（9/13 日）。

【日常生活】

ムニの日常生活を１日のタイムテーブルのなかでみていきたいと思います。

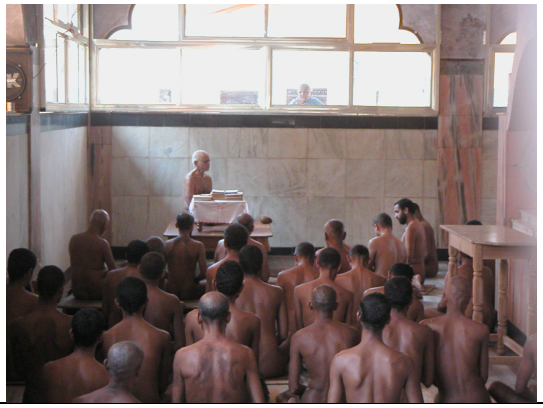
われわれはデリーの Preet vihar におきましても Upādhyāya Guptisāgara-jī から１日のタイムテーブルにつきまして聴いておりましたが、デリーではダシャ・ラクシャナ・パルバンの時でありましたので、寺院でのプージャーやその後の説法など、この時期だけの変則的なスケジュールが加味されていました。マドゥヤ・プラデーシュのビナバラ村での取材で分かりましたアーチャーリヤ Vidyāsāgara のサンガのタイムテーブルは以下になります。１日の始まりや終わりの時間、食事時間など、デリーでの Guptisāgara さんのスケジュールと基本的には変わる

ところもありませんし、雨安居中のムニの１日の生活としてこれを紹介させていただきたいと思います。

ムニの１日のスケジュール

時　　間	予　　定
① 03:00～05:00	起床。bhajan（讃歌）、sāmāyika（瞑想）、bhakti（信愛）などで過ごす。 ※こちらのタイムテーブルの最初と最後を見ていただくとお分かりになるかと思いますが、彼らムニは午前０時に就寝し、午前３時に起床しています。起床して真っ先に行いますことが、Bhajan（讃歌）、Samayik（瞑想）、bhakti（信愛）であるとのことです。Arahasāgara muni の話しでは、睡眠中の罪についての懺悔、プラヤース・チッタも起床してすぐに行うとのことでした。
② 05:00～06:00	suprabhatam（日の出前、の意） bhakti. ムニたちが 24 人のティールカンタラの Bhajan（讃歌）を歌う。 ※それから午前５時から 24 人の Tīrthaṅkara への bhakti を行ない、Tīrthaṅkara への敬信の気持ちを示し、Bhajan（讃歌）を歌います。
③ 06:00～	グル・バクティ（Guru-bhakti, ācārya-bhakti） ※そして Muni は午前６時前後までに三々五々、アーチャーリヤ、ヴィドゥヤ・サーガラ・ジーの僧坊へ集ってまいりまして、グル・バクティを行ない、グルへの敬信の気持ちを示します。15 分間の間に３回くらい、マントラを一斉に唱えておりました。
④ 06:15～07:15	トイレ・タイム ※次は「トイレ・タイム」ということになります。午前 6 時 15 分から１時間ほど設けられています。大便をする場合の用心も、ムニの 28 のグナの内の１つと考えられおり、大便をすることを（用心 れているようです（奥田 を利用することができま ャーラ』には、「人里離 どを捨てることが、（大 050）と言います。上の が広々として良かったの

	ん。このことにつきまして、『ムーラーチャーラ』には、「人里離れた、（人の）咎めのない（場所）に、大便などを捨てることが、（大便などを）おろす（際の）用心である」（p.1050）と言います。上の写真を見ていただきたいと思います。背景が広々として良かったので、つい表紙に使ってしまいましたが、ビナバラ村の寺院の外に出て、ムニたちが⑥ 08:15～09:00 の「空き時間」を利用しまして、用を足すために出掛けていく光景です。 じつは正式な「トイレ・タイム」には次のような写真の道を通りまして（写真左）、寺院から１ｋｍほど離れた場所に、つぎのような場所があり（写真右）、ここを利用しているとのことでした。 ムニはトイレの施設が使えませんので、51 人ものムニ・サンガに なりますと、トイレの条件も雨安居地を決める重要なファクターになるようです。この寺院では草の上を歩めないムニのためにトイレまでの農道を石畳にするような苦労があったと聞きました。 ちなみに仏教では、境内の僧院から離れたところにトイレが作ってあり、入るときには戸の前で咳払いをするとか、トイレの順番は法臘によらなくてよいなどの規則があります。
⑤ 07:15～08:15	アーチャーリヤによる授業（※非公開） ※現在は、Dhavalājī-granth を講読。
⑥ 08:15～09:00	空き時間（調整時間） ※この 45 分間の空き時間でトイレに行く Muni もお見かけしました。
⑦ 09:00～09:20	アーチャーリヤ・プージャー（ācārya śrī kī pūjan）

	※この時間、一般在家信者によるアーチャーリヤへの供養と礼拝が行われます。この間、アーチャーリヤは言葉を発しません。結跏趺坐して台座に座り、仏像のような状態で、信者さんの読む経典を黙って聞いています。 プージャーが終わりますとアーチャーリヤのもとに信者さんが詰め寄り、足下に供物を捧げます。
⑧ 09:30～	乞食儀礼（paḍagāhanā-vidhi）　食事 ※食事については、この後で、少し詳しく説明いたします。
⑨ 11:50～	50 人のムニの食事報告 ※食後にはムニはアーチャーリヤのもとに集まり、食事報告を行ないます。ムニはここで食事中に「32 の失敗」に抵触することがなかったかどうか、アーチャーリヤに報告いたします。これに抵触いたしますとその場で食事を中止し、翌日は断食をすることになりますが、そのことをこの場で情報を得ているようです。 
⑩ 12:00～13:30	sāmāyika（瞑想）（※掲示板によると、14:00 まで在家者の入室禁止） ※正午から 1 時間半、ムニは Samaik、冥想を行ないます。写真はこの時間帯に冥想している Arahasāgara ムニでして、隣りの建物の屋上からムニの僧坊を撮ったものです。デリーでの Gupthisāgara 師も食後の午前 11 時前後より一般信者さんの表敬訪

	より一般信者さんの表敬訪問に対応されていらっしゃいましたが、正午になりますと、別室にこもり冥想をなさいます。
⑪ 14:30～15:50	アーチャーリヤによる授業（公開）。日曜は説法。 ※外のテントでアーチャーリヤ、Vidyāsāgaraがムニと在家者に公開授業を行ないます。今回（2005年9月）の授業内容は“ātmānuśāsanagranth”ということでした。授業の折々には質疑応答も行なっていました。ステージの一段高い壇上にVidyāsāgaraが坐し、その両わき左右にムニたちが別れて座ります。在家者はステージの下に座ります。また日曜日はVidyāsāgaraの説法が行われていました。
⑫ 18:00～	グル・バクティ（Guru-bhakti, ācārya-bhakti） ※午前６時と同様、午後６時にもグル・バクティが行われます。
⑬ 19:30～21:30	sāmāyika （瞑想）
⑭ 21:30～23:00	vaiyyāvṛtti（※在家者がムニたちに足を揉むなどの奉仕）
⑮ 23:00～24:00	sāmāyika（瞑想）
⑯ 00:00～03:00	viśrama（休憩、睡眠）

ちなみに、鈴木正崇著の『スリランカの宗教と社会－－文化人類学的考察』（p.98）による現代のスリランカの比丘の一日を紹介しておきます。

5 時～5 時 30 分	起床
6 時 30 分～6 時 45 分	仏陀像への供食
7 時～7 時 30 分	朝食
8 時～10 時	掃除、水くみ
10 時 30 分～	水浴
11 時～11 時 15 分	仏陀像への供食
11 時 30 分～12 時	昼食
13 時～	昼寝、来客、葬式

19 時　　仏陀供養（Buddha pūjā　雨安居の場合）

21 時　　就寝

また *Sumaṅgala-vilāsinī* というパーリ聖典の注釈書文献によりますと、釈尊はつぎのように一日を過ごされたとされています。

（午前）早朝に起き、洗面などの身支度をして、行乞時まで坐禅。

一人であるいは比丘サンガに囲まれて町あるいは村へ。人々は座を設け、托鉢食によって奉仕する。食事が終わると説法。

精舎に帰って比丘たちが食事の努めを終わるのを待って、香室（釈尊の居室）に入る。

（午後）比丘たちに教誡され、比丘たちはその指示にしたがってそれぞれの道場に行く。

香室に入られ、もし望まれるなら師子臥。

第 2 分には世界を観察され、第 3 分には人々が訪れ、説法。

（夜）初夜分（夕刻から初更）には、もし望まれるなら水浴室で水浴び。その後独座、あるいは訪れる比丘に指導。

中夜分には神々が訪れて、これを指導。

後夜分には、一分に経行してから、二分に香室にて師子臥、三分に起きて坐禅。

Sumaṅgala-vilāsinī　（DN.-A.）vol.1　p.45 以下（片山一良訳「パーリ仏典　長部　戒蘊篇　　1」大蔵出版　p.363 以下）参照

［食事］

（1）乞食儀礼（paḍagāhanā-vidhi）；ディガンバラ派のムニは‘paḍagāhanā-vidhi’という一連の儀式によって食事を得ています。ディガンバラ派のムニは鉢を持ちません。紀元 1 世紀のアーチャーリヤ、クンダクンダが「裸形であること、手を鉢にすることが解脱への唯一の道である」と説いたそのことを厳格に守っています。在家の信者さんにとりまして、ムニが鉢を持たずに歩いておりましても、単に遊行されているのか、食を求めて乞食をされているのか、その意思が伝わらないわけでございまして、そこでムニは乞食の時には āhāra-mudrā（アーハーラ・ムドラー）と言われる乞食のポーズをして歩きます。こちらがそのポーズの写真ですが、右手の指先を右肩に当てるような感じで歩かれるわけです。

乞食儀礼（paḍagāhanā-vidhi）を撮影した 41 分間の映像がございますが、その詳細は本日

は省かせていただきますが、āhāra-mudrā（アーハーラ・ムドラー）で登場いたしましたムニに対して、在家のグループが「こちらへ、こちらへ」と声をおかけいたします。そこでムニが立ち止まるならば、ムニを右遶三匝して、それから食事の場所までいざなってまいります。そして āhāra-mudrā（アーハーラ・ムドラー）のポーズをとったまま台座の上に座り、プージャーの儀式を受け、手水を済ませおもむろに立ち上がります。

Mulācāra には、立食とは、「壁など（に凭れること）なく、生き物（また、生命）のいない三つの場所に、足を平行にして立ちつつ、手の鉢で食べることが、立食である」（奥田［1974年］p.（82））としています。まったくの裸形でありますので、きょうの上映は控えますが、まさにそのように用心して立ち位置を定めます。

たとえば病気になって「立って食べる」ということができない時、われわれの場合、病人だから寝た姿勢で栄養を摂ればいいと、当然、思うわけですけれど、「立って食べる」ということが muni のグナであり、彼らの誇りは muni のグナを捨ててまで食べない、というものであります。また病人が無理をして立って食べたとしても、食事中によろけるのはもちろん、足を揺らしたりするようなことがあれば、その時点で食事は中止となり、翌日は断食をしなければならなくなります。また食事のなかに虫が入っていてもなりません。食事中に起ってはいけないこととして「32 の失敗」を数えます。これについてムニも在家者も注意しなければならないわけです。ビナバラ村ではこの食事中の失敗が続き、8 日間の断食をしていたムニがいました。目がうつろで、食事をしない、サポート役のムニがそばにつき、在家信者に「失敗」がないように指示していましたが、その断食開けのムニに食事を施与し、無事成功させる機会に恵まれました Om Prakash Jain さんは、今日の布施はそれだけ功徳があるものであったと話しをされていました。了解を得ていて、途中まで撮影しておりましたが、途中、サポート役のムニから指示がでましてカメラを向けるのを取り止めました。

さて、これが手を鉢にして食べる食事中の写真です。食事中に合わせた手がほどけることがあってもいけません。それはまた食事の終わりを告げる合図でもあります。

じつは釈尊の生涯を著した仏伝のネタ本は律蔵の「受戒犍度」であるわけですけども、ここに釈尊が成道後、初めて食事を供養されるときの話しがあります。釈尊が解脱の楽しみを楽しまれていたとき、タプッサ（Tapussa）とバッリカ（Bhallika）の２商人が釈尊に対して成道後最初の食事として、麦菓子と蜜団子を差し上げようとしました。そのときに、釈尊は「もろもろの如来は手では受け取らない。わたしは何でこれを受け取ろうか」と心で思われます。この

とき四大天王が四方より４個の石鉢を持ってきてこれを献上いたしました。それが合して１つの石鉢になりました。

ここにさりげなく、「もろもろの如来は手では受け取らない」と出てまいりますが、じつに手で受け取る他宗派、マハーヴィーラがいたからこそ、こう述べられているわけでございます。

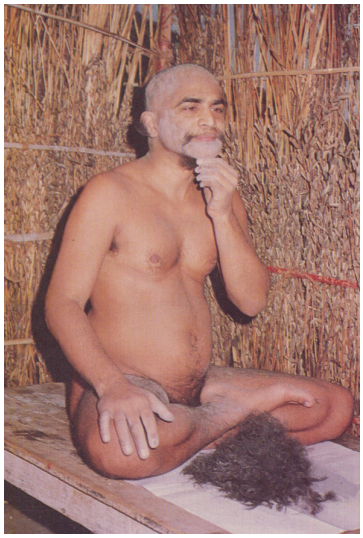
さらにこの後、「受戒犍度」のなかには、鉢を持たずに出家した者の話しが出ます。鉢がないので托鉢をするのに食事を手で受け、在家者より「外道の如し」の非難されたことにより、鉢を持たない者の出家を禁止され、出家させた者は悪作に堕す、と制定されました。

ちなみに仏教では石鉢は釈尊の鉢として禁止し、比丘の食事の鉢の材質は鉄や瀬戸物であるよう規定されています。これに対してジャイナ教の白衣派は瓢箪や木材、あるいは土製であることが規定されています。

［身だしなみ］

身だしなみと言いましても、ムニは服を着ませんので、髪の毛や口髭、顎髭などの処理法、爪などの処理法をお話しておこうと思います。

ムニのグナの 22 番目に「抜毛すること」とあります。釈尊の成道前の苦行のなかでは「抜毛」をされていたことはすでに見ました。ムニ（Kunthusāgara、Arahasāgara）からの聴き取りでは、２ヶ月から長くとも４ヶ月に至るまでには、抜毛（keśaloñca）を行わなければならないとのことでした。頭髪だけでなく、口ひげ、顎髭も毟り取るとのことです。確かに頭髪や髭が伸びているムニもいましたが、最大４ヶ月ということであるなら、この位は伸びると思いますし、彼らはケジラミなどの殺生を恐れてハサミや剃刀を使いません。引き抜く、「ロンチャ」するわけですが、１ヶ月くらいの長さではなかなかホールドが難しくて抜きづらいのであろうと思います。写真はウパーディヤーヤのグプティ・サーガラが抜毛をしたときのものです。頭部や口周辺が白くなっていますが、これは今、まさに引き抜いた跡が残っているものです。足下には抜いた毛が積まれています。



Mūlācāra にも「そして（四ヶ月が終わる前後には）最低の抜毛が行われるべきである」とあります。抜毛の日は断食を行って１、２時間、長い人では５時間かかる人もいるとのことでした。

また、腋毛や胸毛、陰毛などを抜くことは禁止されていますが、これは仏教も同様です。また Brahmacārī、Kṣullaka は床屋に行けますが Ailaka の段階から行けないということです。

また爪につきましては、グプティ・サーガラ・ジーによりますと、手の爪は岩などでやすり

をかけるとのことでした。トイレでお湯を使うと爪が柔らかくなり、その折に手の爪を摩耗させるのだともおっしゃっていらっしゃいました。そして足の爪は手で折って切るのだそうです。

【まとめに代えて】

デリーのグプティ・サーガラさんは 24 回の雨安居地の内訳として、最近こそ４回はデリーやチャンディーガルの都市であったが（*都会人に対する布教のために抜擢された)、残りの 20 回は村やジャングルであったと言われました。さきほどの抜毛の写真の背景でイメージは分かるかと思います。「ジャングルでの食事などはどうされるのか？」とお伺いしましたところ、周りの信徒の人たちが笑いながら、「われわれが持っていくので心配はない」と言われました。ただ‘jungle’とはヒンディー語で‘村の近くの林’という意味であるそうで、仏教でいう「アーラニヤカ」であると思いました。出家者といっても在家信者の施食によらなければ生活できませんし、一方、在家信者もまたムニへの信頼がなければ、生活を支える人生の価値観を失ってしまいます。両者は（共に依存しあい）緊密に寄り添っているふうに見えました。‘村の近くの林’というスタンスこそ在家・出家の関係を表すのに似付かわしいものであるように思えます。

今回の調査のなかではじつに多くの在家信者のみなさんともお話ししましたが、自分が尊敬し、帰依できるムニを探すのにじつに真剣であると思いました。このムニが本物であるかどうか見極めるために方々に出かけ、説法を聞いているのだという人、そして今、このムニこそがその人だと思っている人、さまざまでした。ムニも尊敬されるのでなければ飢えるだけですので、地方の辺鄙な田舎で雨期を過ごし、一つのクラ（サンガの生活単位？）として 50 人もの若いムニの出家生活を支えているにつけ、アーチャーリヤ、ヴィドゥヤ・サーガルの求心力を感じました。じっさいに先の『サンスカーラ』という雨期の滞在地の冊子を分析しますと、１人２人、３人までが非常に多く、（１人というのにはブラフマチャーリーがついていて、数に入っていないのだと思いますが)、せいぜい６人７人までで、50 人という集団（クラ）は例外中の例外です。

お釈迦さまも飢饉の折などは、釈尊の大サンガが（仏典ではしばしば五百人であったりしますが）１ヶ所で雨安居するならば、施食も得難いし、その町・村も迷惑であろうというので、知人・知己を頼っておのおの雨安居をするように指示を出されたこともあります。しかしそのような状況ではないならば、ふつうは、仏典にも書いてあるように、地方の人々が塩や油や米などを車に載せて、僧園の外に車陣を張って施食をしようと待ち構えた、とあるような光景があったであろうと思います。釈尊がシャカ国で説法をされて、この後コーサラ国の舎衛城で雨安居に入られるというので、シャカ族のナンディヤという人は一緒にそのままついて行き、雨期を過ごしたという記事もあります。

このたびのビナバラ村の光景は仏典にでもあるような、そのような情景を彷彿とさせるもの

でございました。51 人のムニ（断食をするムニもいますので、40 人前後か？）の施食のために 100 家族以上もの人が食料をもって集り、乞食儀礼では５～６人の家族が参加し、キッチンの仕度のためにさらに３，４人いますので、１千人近くもの人がじぶんのところの施食をとっていただこうと競い合っているわけでございます。せっかく準備をしても食べてもらえない家族が半分以上あるわけです。「ヘィ、スヴァーミ、ナマストゥ、アトロー、アットロー、ティシュトー、ティシュトー」という声かけには、「こちら、こちら、立ち止まって、立ち止まって」というものです。施食の権利の取り合いは、仏典にもままありますが、有名なところではアンバパーリーとヴァッジ族の人たちとの間でありましたし、さきのウダーナの目連の在家の奉仕者の話しもその類いの話しです。

ビナバラ村の寺院の僧房には１部屋 1 人か２人でムニが生活しておりますが、ムニの空き時間になりますと、いろいろ信者が押しかけてまいります。そしてただ順々にプージャー（供養と礼拝）を行っていく人だけではなしに、人生の相談やらなにやら、若い信者さんから年配の信者さんまで、目当てのムニのそばで腰を落ち着けて教えを聞いている人たちもいます。祇園精舎で釈尊が雨安居をされていたときも、とくにお釈迦さまだけを目当てにしてというのではなく、お釈迦様は恐れ多いということもあって、舎利弗・目連や阿難や、その他の仏弟子のもとでこのように説法を聞いて仏教に親しみを得ていたのであろうと、ビナバラ村での光景はそのような想像力をかき立ててくれました。

われわれが釈尊伝を描くときは、釈尊教団の形成史も加味したものになるであろうと思います。初期の釈尊教団はある完成体というよりは、同じく沙門主義より生れた他宗教との差別化を果たしていく過程にあったであろうと思われます。最初、仏典にも散見されるように、仏教が外道とよぶ彼ら出家者たちとの生活様式も渾然としておりました。教団形成のエネルギッシュで、ヴィヴィッドなときは、その差別化の対象が排除の運動として顕在化しているときではないかと思います。それによって仏教が「仏教」になり、「仏教」であることの統合感覚といったものは、そのような差別化によって生れたものですが、適宜、その周縁においやったものがなんであったか、そのことを思い出すこともまた釈尊伝の中心で、ヴィヴィッドな記憶を呼び戻すことになろうかと存じます。釈尊とその仏弟子たちと、その時代のすがたを生き生きと描き出すためには、遠ざけたものを目に見える状態にしておくことも必要であり、原始仏教聖典のなかの周縁においやられているこのような異端（外道）の姿を意識してみて、はじめて描けるというものではないかと思いました。インドの田舎の自然のなかで、連綿と生き続けている宗教のリアリティの近在に、この丘の向こうに仏教サンガの比丘たちをありありと思い浮かべることができるような気がいたしました。

このような発見の機会を与えていただきました、開祖様、会長先生、教団関係者の皆さまに、こころより感謝申し上げまして、本日の報告とさせていただきます。ご静聴、ありがとうござ

いました。

＊本稿は中島と森が作成した元原稿を、ホームページに掲載するために森が編集しなおしたものである。（2009.12.5）